

# バラツク生活

森久保 良子

中央三丁目

昭和二〇年五月、中央から鍋横一帯が焼夷弾によって火の海になってしまった。

前に電話局のあった一帯が、強制疎開でその後避難場所になっていた。そこへはともに行けず反対側の氷川様の方へ逃げた。すぐそばにある白玉稲荷は、火から守ってくれる神様と聞いていたが、そのお稲荷さんも焼けてしまった。私達は氷川様の方へ逃げたが、氷川様の方からも多くの人がこちらに向かつて逃げて来たので「これはあぶない」と思い、谷戸小学校のそばのくぼ地に避難した。

子供八人と母をつれ、それぞれに米と芋の入った袋をもたせていた。タライをかぶって逃げて来たが、今度は氷川様が燃えはじめ、皆で火を消した。すると今度は塔山小学校が燃えはじめ、みるみるうちに燃え落ちた。

夜が明けるのを待って、家に帰ることにした。母と子供達はほとんど口も聞かず、私について歩きだした。塔の山の三重の塔まで来ると、たくさんの死体があつて地獄のようだった。

中野警察近くになって、家の方が焼けているのを知り、立ち止まって考えたが、やっぱり自分の家の跡へいくことにした。焼け跡にしばらく立ちすくんでいたが、まず、どうすればよいか考えた。私たちには、田舎もたよって行く所もなく、野宿することになった。幸い防空壕が掘つてあつたので大助かりした。

翌日、青梅街道をはさんだ向かい側の材木屋さんから古材を分けてもらつて、焼けトタンを拾つてきて、掘立小屋を作つた。近くに歯医者さんが焼け残つていて、トイレや水を使わせてもらい、本当に有り難かつた。油又味噌屋さんでは焼けたお味噌やお米を分けてくれて子供達はよろこんで食べた。

食糧の買い出しでは、大変こわい思いをした。知人と二人で八王子の方へ買い出しにいき、できるだけたくさん持とうと、お芋を背中に八貫、前に一貫、両手に野菜をさげて歩いた。

ところが、一駅で取り締まりがあるから次の駅へ行った方がよい」と言われ、二人で土手の上の電車の線路を歩きはじめた。

あとからもたくさんの方が来るので足もとに気をつけながら歩いた。その時「電車が来るよ」と前の方から叫んだ。どうにもならず、持っていた食糧を土手下に投げ、夢中ですべり降りた。生きた心地がしなかった。これだけの食糧で幾日食べられるかと思うとがっかりする。しかし、不思議なことに死ということ はあまり考えなかった。生きることに夢中だった。

